

になると縫合の嵌合度を表すフラクタル次元 (D) は大きな値となっていた。縫合の複雑性は成長に伴い増加しており、頭蓋冠の発育における部位差はそれぞれの縫合での D 値の変化に影響を与えていることが考えられた。

【結 論】頭蓋冠のフラクタル解析による縫合部の定量的評価により、成長発育を評価できる可能性が示唆された。

3) 手用SSファイルを用いた根管形成におけるトルクコントロールの効果

○東 春生, 鳥居 祥司, 高橋 慶壮
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒 言】古典的なステップバック法では、手用ファイル操作時に回転角度を90度あるいは90度以下と記載されているが、これはファイルの破折防止が目的で、根管形成に及ぼす効果が科学的に検証されてはいない。すなわち、ファイルの回転角度を制御するという概念は欠落している。

本研究の目的は、ステップバック法による根管形成においてファイル操作時の回転角度を変えた際の根管形成前後の形態変化をマイクロ CT 解析し、トランスポート量および根管内壁の切削量を比較・検討することである。

【材料と方法】天然歯を鑄型にして作製した上顎犬歯の透明根管模型25本を試料に用いた。根管形成前の全ての模型をマイクロ CT 撮影した。根管形成法は手用 SS ファイル (K ファイル) を用いたステップバック法を選択した。ファイルの回転角度を明視化してファイルを操作した。次に、根管形成時のファイル操作時の回転角度を15°、30°、60°、90°、180°回転群に設定し、turn & pull 運動で根管形成を実施した (各 n=5)。各模型の根管形成前後の画像を解析し、根管の体積、形態変化およびトランスポート量を解析した。統計処理には ANOVA を用いた。

【結 果】180°回転群では、根管系を逸脱した過剰な切削が顕著で特に根尖孔部で根管形成前後の形態変化が大きかった。

根管形成前後の中心点間距離の変位は、180°回転群が、根尖孔部の位置で他の回転群に比べ有意に大きく ($p<0.05$)、1 mm の位置で15°、30°、

60°回転群に比べ有意に大きかった ($p<0.05$)。

【考察および結論】ファイル操作時の回転角度が30°の際に根管の形態変化およびトランスポート量が少ないことから、回転角度を30°前後に設定することで根管本来の形態を保持した根管形成が可能になる。

4) 地域医療支援歯科の発足とその展望

○山家 尚仁, 佐藤 健太, 佐藤麻里恵
北條健太郎, 奥座 崇史, 保田 穰
成田 知史, 小松 泰典, 渡邊 崇
鈴木 史彦, 清野 晃孝, 佐々木重夫
瀬川 洋, 杉田 俊博

(奥羽大・歯・附属病院・地域医療支援歯科)

【緒 言】厚生労働省は在宅医療への推進を掲げており、本院では在宅での一般歯科診療、口腔ケア・摂食嚥下リハビリテーション、全身麻酔下でなくても対応できる障がい者に対する歯科処置などすべてのニーズに応えるための科として地域医療支援歯科を発足したので、平成28年4月から10月までの当科での業務概要および今後の展望を報告する。

【概 要】平成28年4月から10月までに訪問歯科診療92件、嚥下内視鏡検査37件、摂食機能訓練83件、経管栄養入所者の口腔ケア56件、ミールラウンド168件、食後の口腔ケア介助560件、障がい者歯科治療・全麻113件、鎮静1件などの業務実績および歯科医師国家資格以外の専門資格取得者の確保、増員を目指すといった当科における今後の課題と展望を提示した。

【考 察】今後、更なる高齢化が進み、高齢により通院が困難な患者、障がい者や認知症などで通院が困難な患者、歯科のない病院からの歯科処置及び口腔ケア依頼の増加が予想される。そこで、郡山市内の病院との連携を強化し、この様な患者に対応できるよう当院も環境を整える必要があると考える。

また訪問診療は、通常の外来患者に対する診療とは大きく異なり、診療器材、診療姿勢、光源を含めた周囲の診療環境や患者の基礎疾患や現病歴など多くの問題を訪問先で考慮しなければならない。その中で、最も重要な事項は安全対策であり、